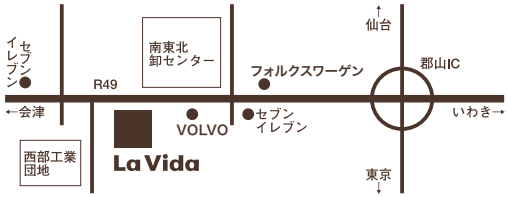


La Vida

www.lavida.co.jp

ラ・ビーダ

〒963-0541 福島県郡山市喜久田町堀ノ内字地田東15-2
TEL:024-959-3333　FAX:024-959-3725
e-mail: info@lavida.co.jp

300年生きる台

aテーブル

水楢

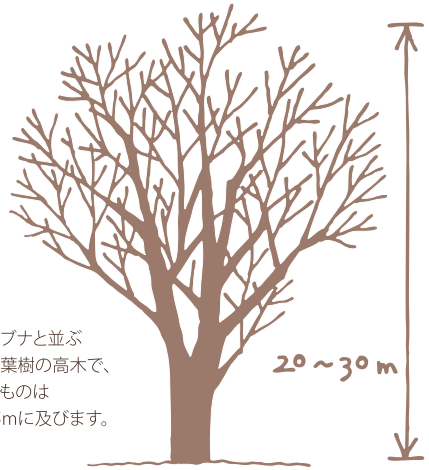
ミズナラ

ミズナラ【ブナ科コナラ属】

ミズナラという呼び名は、
伐採の時に多量の水が
出ることが由来です。

葉は、縁に先がギザギザ
した鋸歯があります。
基部はくさび形に狭く
なっています。

実は、〈どんぐり〉です。



〈樹形〉ブナと並ぶ
落葉広葉樹の高木で、
大きいものは
樹高35mに及びます。

世界に誇る日本の木
——北海道のミズナラ

今では市場にめったに出てこない北海道のミズナラ。明治～大正時代に、開拓のために多量に伐採されました。当時の日本では、硬くて水分の多いミズナラは、とても扱いづらい材として厄介視され、海外へ輸出されていました。
一方、海外では、硬く穏やかな木目のミズナラは評価が高く【King of Forest（森の王様）】と呼ばれ、なかでも良質な日本産は【Japanese　Oak】と呼ばれて重宝され続け、今でもその人気が衰えません。日本でも人気がある北欧家具の多くはミズナラで作られています。とても美味しいと有名なウイスキーの樽にもミズナラが使われています。

ミズナラ＝オーク？

海外では【Oak（オーク）】と呼ばれるミズナラですが、じつは〈オーク=ミズナラ〉とはちょっと違います。オークとはブナ科コナラ属（学名：Quercus）の植物全般を指し、落葉樹であるナラ（楢）と常緑樹であるカシ（樫）のどちらもオークと呼ばれます。

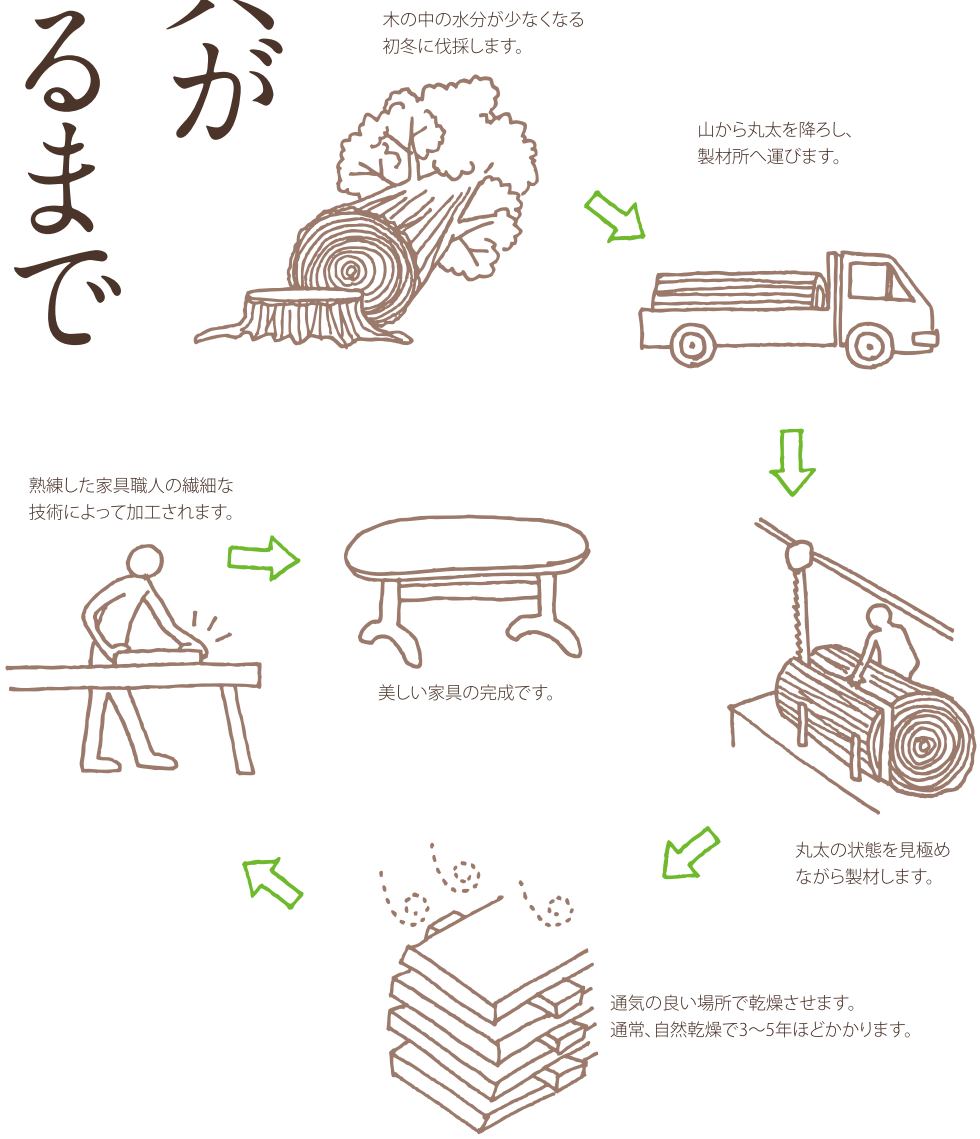
樹齢による木肌

同じミズナラでも、樹齢によって表情が変わります。300年以上生きたミズナラはオイルで仕上げると、一瞬にして黄金色に。この色合いから、ヨーロッパでは【Golden Oak】と呼ばれています。

若いロシア産オーク

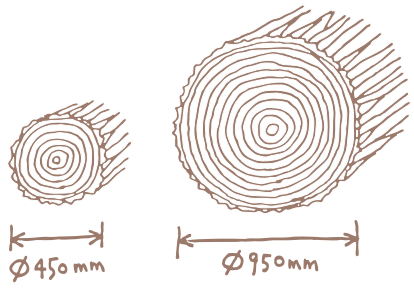
樹齢300年のミズナラ

家具ができるまで



樹齢と年輪と家具の話

300年生きた木は、家具にしてからも同じだけの年月もつと言われています。デンマークやアメリカなど海外のオークションでは、状態の良い古い家具はアンティークとして珍重されます。無垢の木でできていてデザイン・材質が良い家具は特に高値で取引され、年々その価格が上がっています。



≒樹齢80年　≒樹齢350年

木の寿命と循環

ミズナラの寿命は長くて約400年程といわれています。寿命を終えた木は、朽ち果ててしまうだけですが、そうなる前に木挽きや木こりなど「森の番人」と呼ばれる人々に見出された木が、人の手を介して家具となり、新しい数百年を生きることになります。

木をめぐる貿易の話

近年、各国で、丸太の木のままでは国外への輸出を認めない国が増えてきました。それは自国の林業を守るためであり、最低でも1回、丸太にのこぎりを入れて製材した状態でなければ輸出できなくなってきています。

家の重心

樹齢300年の生命へ、さらなる300年の責任。

厳寒の森で幾世紀を越えた、樹齢300年のミズナラ。大人二人で、やっと腕をまわせるほどの太さの大木は、森の中で神々しく、鋸を入れる瞬間、畏怖とも呼べるためらいすら覚えます。森で生きぬいてきた古木の全てが家具になれるわけではありません。木挽きと呼ばれる、木の目利きのプロフェッショナルに選ばれ、腕利きの木こりが敬意とともに伐り、優れた職人が丹念に技をかけることで、家具としてさらなる数百年を人とともに生きるのです。

森の生命を、森からいただく。作り手にも、使い手にも、その生命への責任があります。ラ・ビーダが樹齢300年の木を切り、家具にするということ。それは、その木の生命を請け負い、さらに300年を家具として全うさせようという、家具屋としての強い意志でもあります。

一本の木から現された一卓のテーブル。永く豊かな森の記憶に、家族の物語が書き重なってゆく。それは「家の一部」となり、囲んだ家族の象徴となって次代へと継がれるにふさわしい一卓です。

それは、人生を変える近道。

「aテーブル」は、ラ・ビーダのプロダクトの集大成。ラ・ビーダの家具=「aテーブル」といっても過言ではないくらい、日本の木の文化と生活を熟慮し、匠の技を注ぎ込んで誕生したダイニングテーブルです。もっとも大きな特徴は、家族の集う場に容々たる空間を生みだす天板と2本脚の強靭な構造。これは、装飾を限りなくそぎ落とし機能美を究めたシェーカー家具や、中世ヨーロッパの修道院に遺される長テーブルと同様のスタイル。シンプルな構造は、素材を無駄にせず、明快な2本脚で、脚まわりはすっきり。隣同士で膝がぶつかることも、テーブルの角脚に爪先をぶつけることもありません。天板を楕円にしたことで、1人使いはもちろん、家族が2人〜4人でも、また6人から8人が椅子をまるく並べても使い心地にそん色のない秀逸さ。かつての囲炉裏端に似た、幸せな時間や空間を約束してくれる一台となりました。朝夕に家族が集まる。おいしい食事を味わう。何気ない会話で心を通わせる。だれでも、どこでも、しあわせになれるテーブル。「aテーブル」は、「ダイニングテーブル=家の重心」として、あなたとあなたの家族にとって唯一、かけがえのない存在となることでしょう。

接（は）ぎの技法1

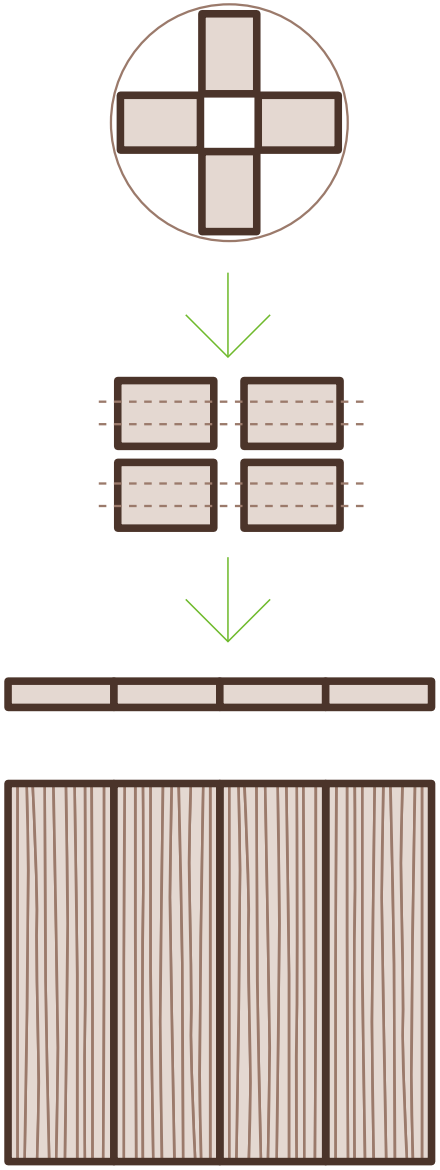
「aテーブル」の天板部分は、
樹齢の高いミズナラの木目の美しさを
より引き立たせるために、
独特の「接ぎ」の技法を採用しています。

小樽オークのフリッチとは

フリッチ【Flitch】とは、丸太を粗く挽いて角材にしたものを指します。日本語で杣角(ソマカク)とも呼ばれ、かつては伐採した木材を運搬用に軽くするために、山で杣人によって製材されたので、この名前があるそうです。また、積み上げて保管するのに適した最小限の形ともいえます。
北海道産のミズナラ、かつては小樽港から良材として欧米に輸出されていたため通称「小樽オーク」と呼ばれるミズナラのフリッチ。現在ラ・ビーダ店内で保管しているものは、推定樹齢300年のもの。これらが、家具へと姿を変えていきます。

フリッチからとれる板を使う〈柾接ぎ〉

フリッチから柾目（まさめ）の板をとり、並べてつなぐ技法を〈柾接ぎ〉といいます。柾目が良く通り、色の揃った材料を使うことで、まるで一枚板のように見えます。また、柾目と杢目（もくめ）の中間のものをつないだものは〈追い柾接ぎ〉といいます。

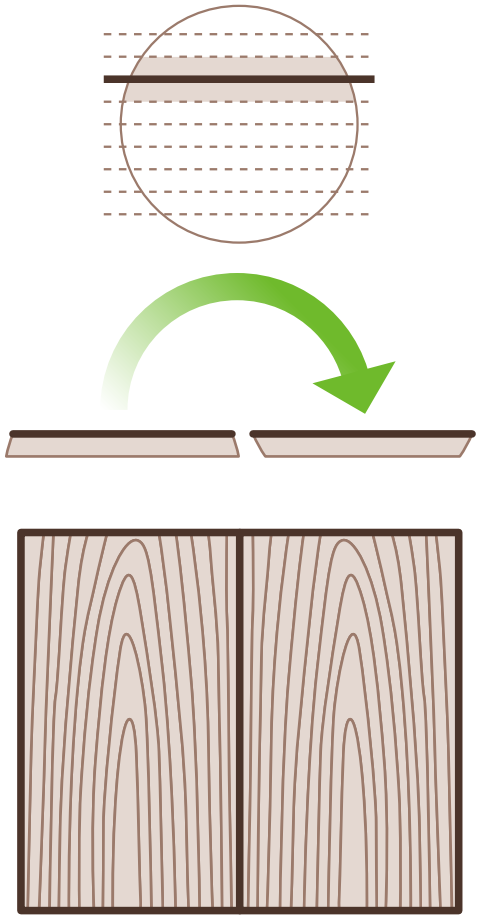


接（は）ぎの技法2

「aテーブル」の天板部分にほどこされる
よりスペシャルな「接ぎ」の技法を紹介します。

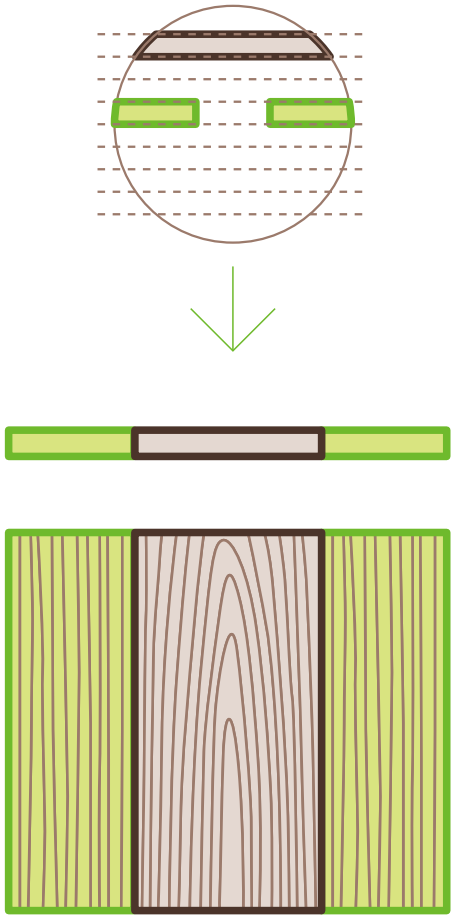
ブックマッチ

丸太から製材した隣同士の板を、まるで本を開くように左右対称に並べる技法です。木目が左右対称になるので非常に美しく仕上がります。木目の美しさから、扉や引出しの鏡板やテーブルの接ぎ合わせ天板などに使われる事が多い技法です。



中杢柾接ぎ

丸太の中心から遠い「中杢（なかもく）」と呼ばれる板に、中心部の両側からとれる「柾目（まさめ）」の板を継ぎ足して、板幅を広くする技法です。一見すると、まるで一枚板のようにみえる、美しい接ぎの技法です。



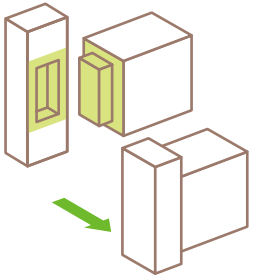
木組みと意匠

「aテーブル」の各箇所にある接合部分は、
強度や密着度を得るための複数の技法が
家具職人の手によって美しく組み合わされ、
意匠にまで高められています。

脚と貫（ぬき）の接合方法

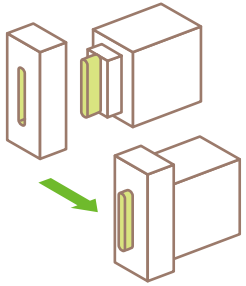
1. 四方胴付きほぞ接ぎ

外観の美しさを重視した基本的なほぞ接ぎで、組み立てるとほぞ穴が見えなくなる接合法です。



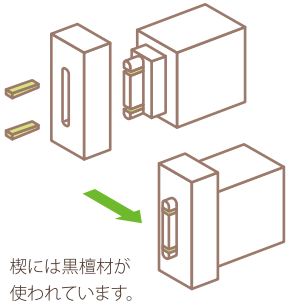
2. 通しほぞ接ぎ

穴を突き抜ける形のほぞです。〈二枚通しほぞ〉の場合、ほぞを並列に二枚並べて接合面積を増やしています。



3. 割り楔ほぞ接ぎ

通しほぞを挿しこんでから木口に楔を打ち、抜けにくくする接合法です。「aテーブル」の場合、この後さらに美観のための加工が施されます。



楔には黒檀材が
使われています。

意匠の特長

面取り

ぶつけても怪我をしないよう安全面に配慮して、全ての角を面取りしています。面取りをすることで、全体的に丸みを帯び、柔らかいデザインに仕上がります。優しく触れる感触の贅沢を日常的に実感していただけます。

天板

経年変化で天板の反りや狂いを最小限におさえるために、天板は厚くしてありますが、目に見える木口部分をテーパー（しだいに細く）に削りました。全体的に厚くするよりも、洗練されたデザインに仕上がります。

脚部先端

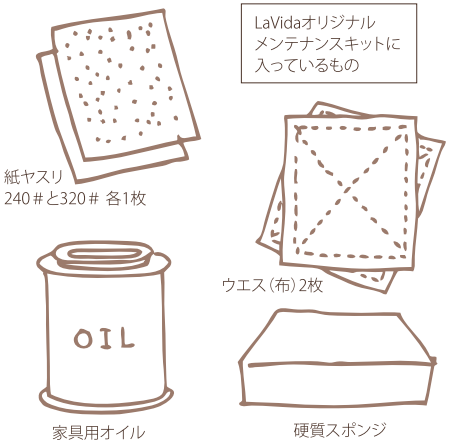
脚部は先端に向かうにつれ平面から丸面へ。足の指がいちばんぶつかりやすい所には、細心の心遣いを、職人の手仕上げで施しています。そのなめらかさを、思わず足の裏で確かめたくなるほどの心地よさです。

接地面

テーブルのガタつきを防ぎ、安定性を保つために、床との接地面は4点になるよう仕上げました。わずかな空間をあけることで、重たく堅苦しい印象を避け、すっきりとしたデザインになっています。

無垢材家具のメンテナンス

無垢材の家具は使う人のくらしに添って経年変化します。
使っているうちに表面の色が徐々に薄くなってきますが、
これは木が呼吸をしているからで、
表面にオイルを拭き込めば、もとのツヤが戻ります。
年2〜4回程のメンテナンスで長く美しい状態を保てますし、
手入れを続けた分だけ個々の持ち味となります。



1: 普段のお手入れ

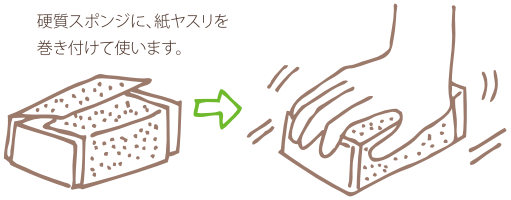
不要な布を適当な大きさにカットし、それにオイルを染み込ませ、木目に沿って伸ばすようにまんべんなく木の表面に塗り込んだ後は、乾いた布で丁寧に拭き込みます。オイルは完全防水ではありませんので、濡れた状態で長時間放置してしまうと、水分がオイルを透過して木の内部に染み込んでしまい、シミの原因となります。グラスの水滴などでシミにならないようにコースターなどをご使用ください。

ウエス（布）は、着古した衣類や
不要なタオルなどを
適当な大きさに切って使えばOK。

2: 表面がかさついてきたら

表面が乾燥してくると触った時にざらつきを感じるようになります。紙ヤスリ（320＃）を、硬質スポンジに巻き付けて、木目に沿って広い面でなでるように軽く磨きます。その後オイルを拭き込んでください。

硬質スポンジに、紙ヤスリを
巻き付けて使います。



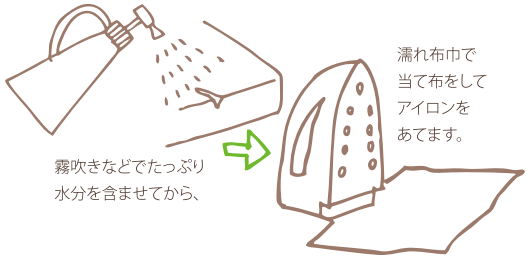
3: 汚れた場合のケア

表面が手垢などで黒ずんだような汚れは、オイルを染み込ませた布で拭き取ればきれいになります。しつこい汚れは薄めた台所洗剤をスポンジに含ませてこすります。その時に出た水分はシミにならないようにしっかり拭き取り、あとは仕上げにオイルを拭き込んでください。

しつこい汚れは台所用の
中性洗剤をぬるま湯で薄め
スポンジに含ませて、
こすります。
汚れが落ちたら水分は
すぐに拭き取り、
オイルで仕上げます。

4: へこみ傷がついてしまった場合

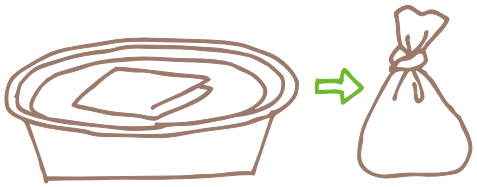
へこんだ部分にたっぷり水分を染み込ませ、濡れた布をあてた上から熱したアイロンでおさえると、ある程度元にもどります。この時、アイロンをあてすぎると焦げますのでご注意ください。そのあとに紙ヤスリ（240＃〜320＃）をかけ、オイルを拭き込んでください。



霧吹きなどでたっぷり
水分を含ませてから、

濡れ布巾で
当て布をして
アイロンを
あてます。

5: メンテナンス後のウエス（布）の処理

家具のメンテナンスに使われる乾性油は、乾燥中に酸素と反応して微量の熱がでます。オイルを含んだ布を何枚か重ねたり丸めたまま放置すると酸化反応熱が蓄熱し、発火することがあります。その時の湿度、温度、油の含み方、重ねた枚数などの条件で度合いはまちまちですが、発火の危険性があります。オイルを含んだ布は、一度使ったら水に浸けるなどして充分に水を含ませて保管し、ビニール袋に入れて燃えるゴミとして処分してください。

空気中の酸素と反応して
発火する場合があるので、
たっぷり水分を含ませてから
ビニール袋などに入れて、
燃えるゴミとして処分します。